

主要部と句のコードスイッチングの容認性

日英語バイリンガルと日本語モノリンガルの比較

吉田 絢奈

要 旨

本研究では日英語バイリンガルと日本語モノリンガルに対して英文内に日本語の名詞、動詞、名詞句、もしくは動詞句を挿入した文内コードスイッチングの容認性判断テストを行った。コードスイッチングはバイリンガルの能力であると言われるため、バイリンガルは全ての種類のスイッチングを容認するが、モノリンガルは容認しないという予測を立てた。容認性判断テストの結果は、バイリンガルは名詞、動詞、名詞句のスイッチングに対して高い容認度を示し、これらは予測に従った。対してモノリンガルは名詞、動詞、動詞句のスイッチングに対して低い容認度を示したため、これらも予測と一致した。一部のスイッチングに対しては予測と異なる結果となったが、バイリンガルは英文内での日本語のコードスイッチングを容認し、モノリンガルは容認しないことが実験結果より明らかとなった。

キーワード

文内コードスイッチング バイリンガル モノリンガル 容認性判断テスト

1 はじめに

コードスイッチングとは、異なる言語が混在する言語産出であり、多言語によって構成される話し方の特徴のひとつである。その例として(1)が挙げられる。

(1) 日本語と英語のコードスイッチング

She bought it for omiyage.

(Nishimura 1997: 119)

「彼女はそれをお土産用買った。」

(1)は一文内で言語の交替が起こっているため、文内コードスイッチング(intrasentential code-switching)と呼ばれ、本研究の研究対象である。本研究では、バイリンガルとモノリンガルがこのような文内で言語が交替されている文に対して異なる容認度を示すことを明らかにすることが目的である。Bullock and Toribio (2012)によると、コードスイッチングとはバイリンガルの能力である。そのため、モノリンガルはコードスイッチングを容認しないが、バイリンガルは容認することが考えられる。このようなモノリンガルとバイリンガル

の言語能力の違いを示すために、本研究では英語の文内に日本語の要素をスイッチさせた日英語文内コードスイッチングの文を両者に提示し、それらの文に対する容認性判断テストを行った。

2 先行研究及び本研究の予測

日英語バイリンガルと日本語モノリンガルの日英語文内コードスイッチングに対する容認度の比較を行った研究として吉田(印刷中)がある。吉田(印刷中)では、バイリンガルとモノリンガルに対して日本語文内の動詞もしくは動詞句部分を英語にスイッチした文をそれぞれ3種類ずつ用意し、参加者に容認度を判断させた。結果として、バイリンガルは1種類のスイッチングに対して高い容認度を示し、2種類に対しては低い容認度を示し、他の3種類には容認とも非容認とも区別のできない容認度を示した。対して、モノリンガルは2種類に対して低い容認度を示し、残りの4種類に対しては容認とも非容認とも判断のできない容認度であった。モノリンガルが過半数のスイッチングに対して容認とも非容認とも判断できない結果となった要因として、分析対象となったコードスイッチングした文の言語が考えられる。吉田(印刷中)では、日本語の文内に英語の要素を取り入れたスイッチングのみを研究対象とした。実験参加者である日本語モノリンガルは、日本語の文内に英語の要素が挿入されているというコードスイッチングの現象自体に対して違和感を覚えるが、日本語で構成されている部分は自然であるため、容認するとも容認しないともする判断を行った可能性が考えられる。そのため、本研究では日本語モノリンガルにとって非母語である英語が大半を占める英文内に日本語を挿入したコードスイッチングを使用した。モノリンガルはそのような文内コードスイッチングに対して、コードスイッチングの現象に対する違和感と、文の大半が母語ではない英語で構成されていることから、文を否定的に捉え低い容認度を示すだろう。

日本語モノリンガルに関しては、英文内に日本語が挿入された場合、低い容認度を示すと予測したが、日英語バイリンガルについては、以下のような予測が可能である。まず、言語の交替は、文レベル、フレーズレベル、語彙レベル、もしくは形態素レベルで可能であると言われている(Mahootian 2006)。本研究は文内コードスイッチングが分析対象であることから、フレーズレベル、語彙レベル、形態素レベルでのコードスイッチングが可能だと考えられる。そのため、語彙レベルのスイッチングとして、(2)のような英文内に日本語の名詞を挿入したスイッチングと、(3)のような日本語の動詞のスイッチングが考えられる。

(2) My busy 夫 used his laptop in the plane last time.

「私の忙しい夫は前回、飛行機の中でパソコンを使用した。」

(3) My teacher 薦めた this book in his class last week.

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

また、上記の(2-3)のような名詞、もしくは動詞のスイッチングは、以下の(4-5)のように先行研究でも確認されている。

(4) She bought it for omiyage. (=1)

「彼女はそれをお土産用買った。」

(5) He never moratta from anybody.

(Nishimura 1986: 137)

「彼は誰からも貰ったことがなかった。」

そのため、日英語バイリンガルはこのような英文内の日本語の名詞、もしくは動詞の挿入を容認することが推測できる。そして、次にフレーズレベルのスイッチングとして、(6-7)に示すような英文内に日本語の名詞句を挿入したスイッチング、日本語の動詞句のスイッチングも可能だと考えられる。

(6) かわいい女の子 slapped the man at the restaurant again.

「かわいい女の子はレストランでまた男性を叩いた。」

(7) My teacher この本を薦めた in his class last week.

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

このような英文内への日本語のフレーズレベルのスイッチングは名詞句での交替の場合、(8)で示すように先行研究で確認されているが、動詞句の交替は管見の限り存在しない。

(8) We never know anna koto.

(Nishimura 1997: 35)

「私達はあんな事は全然知らない。」

しかし、上述のとおり、コードスイッチングはフレーズレベルでも可能であることから、英文内に日本語の名詞句、及び動詞句の挿入を日英語バイリンガルは容認するはずである。そして、日本語モノリンガルは、英文内に日本語を挿入したコードスイッチングをどれも容認しないだろう。つまり、表1でまとめられるように、上記の4種類のコードスイッチングに対して、日英語バイリンガルは容認し、モノリンガルは容認しないことを本研究では容認性判断テストを用いて明らかにする。

表1 スイッチングに対する容認度の予測

スイッチングの種類	容認度	
	バイリンガル	モノリンガル
名詞	○	×
動詞	○	×
名詞句	○	×
動詞句	○	×

○：容認する、×：容認しない

3 実験

3.1 方法

日英語による文内コードスイッチングの文を日英語バイリンガルのグループと日本語モノリンガルのグループに提示し、容認度の判断をさせた。本研究の実験は吉田(印刷中)と同様の参加者であり、同様の質問紙を使用している。

3.1.1 実験参加者

実験参加者は合計20名であり、日英語のバイリンガルのグループが10名(24~28歳、平均25.5歳)、日本語モノリンガルのグループが10名(20~26歳、平均23.1歳)である。本研究では、バイリンガルとモノリンガルを区別する要素として、英語で話す環境で過ごした年数を使用した。そのような経験のない参加者をモノリンガルとし、3年以上そのような環境で過ごした経験のある実験参加者をバイリンガルとして区別した。日英語バイリンガルの実験参加者のうち9名が0~8歳までのうちに初めて英語に接触しており、1名のみ9~11歳までに初めて英語に接触している。日本語モノリンガルの実験参加者は全員日本国内で育ち、教育を受けている。英語への初めての接触は9名が9~14歳までのうちに経験したと回答している。1名のみ0~2歳までのうちに初めて英語に接触している。このグループの全員の実験参加者が英語で話す環境にいた経験がない。しかし、両グループの実験参加者全員には次の2点が共通している。まず、生まれて初めて接触した言語が日本語であり、そして、家庭内では日本語を使用していることである。

7名のモノリンガルにTOEICの受験経験があり(990点満点中545~930; 平均: 748.57, SD: 142.91)、その得点は8名のバイリンガルのTOEIC受験経験者の得点(850~990; 平均: 956.25, SD: 52.9)よりも有意に低いものだった($t(13)=3.84, p=.002$)。

3.1.2 項目

(9-12)に示す8文を実験項目として用意した。英文内に日本語の名詞、動詞、名詞句、もしくは動詞句を挿入したスイッチングのそれぞれに対して2文ずつ作成した。

(9) 名詞のスイッチング

- a. My busy 夫 used his laptop in the plane last time. (=2)

「私の忙しい夫は前回、飛行機の中でパソコンを使用した。」

- b. The tall 男の人 asked for help in the subway station with a loud voice.

「背の高い男の人は大声で地下鉄の駅で助けを求めた。」

(10) 動詞のスイッチング

- a. My teacher 薦めた this book in his class last week. (=3)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

- b. Lisa 買った the tea at the coffee shop often.

「リサはよくコーヒーショップでその紅茶を買った。」

(11) 名詞句のスイッチング

- a. かわいい女の子 slapped the man at the restaurant again. (=6)

「かわいい女の子はレストランでまた男性を叩いた。」

- b. 私の多忙な上司 called his family from the office yesterday.

「私の多忙な上司は昨日、職場から自分の家族に電話をした。」

(12) 動詞句のスイッチング

- a. My teacher この本を薦めた in his class last week. (=7)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

- b. Lisa 紅茶を買った at the coffee shop often.

「リサはよくコーヒーショップでその紅茶を買った。」

上記の8文は76文の文内コードスイッチングされたフィラー文と共に提示された。全ての動詞は目的語に名詞をとる他動詞である。

3.1.3 手続き

実験は、Murvey Online Survey によるインターネットを通じたアンケートによって行った。内容は全て文字化されたものを使用した。実験参加者は始めに、言語背景などの個人情報を入力した。次に、8問からなる容認性判断の練習問題を行った。その後、84問の項目の容認性判断テストを行った。実験参加者は練習問題と実際のテストの両方で1が不自然、6が自然である6件法を使用して自然さを判断した。(13)に示す指示文を練習問題の直前と、実際のテストの直前に提示した。

(13) 指示文

日本語と英語を自由に使用して話すことができる話者(例：バイリンガル)は、2つの言語を混ぜて話すことがときどきあります。そのような話者から次のような文を会話で言われたときに、自然と感じるか、不自然と感じるか判断してください。とても不自然と思う場合は1、とても自然と思う場合は6を選んでください。

3.2 結果

名詞、動詞、名詞句、動詞句の各スイッチングに対して2文ずつの計8文が分析対象である。本研究では、スイッチングを容認するか否かを決定する基準として、3.5を採用した。実験参加者は容認度の判断を6件法で行い、その中間値が3.5である。それぞれのスイッチングに対して、バイリンガルとモノリンガルの容認度を、t検定(片側検定)によって基準の3.5と比較した。表2はその結果である。

表2 容認度の3.5との比較の結果と予測との比較

話者	種類	例	平均	SE	t 値	P 値	予測	結果
バイリンガル	名詞	My busy 夫	5.15	0.43	3.85	.002	○	○
	動詞	薦めた this book	4.25	0.39	1.93	.043	○	○
	名詞句	かわいい女の子	5.00	0.36	4.20	.001	○	○
	動詞句	この本を薦めた	3.65	0.60	0.25	.404	○	?
モノリンガル	名詞	My busy 夫	2.35	0.35	-3.29	.005	×	×
	動詞	薦めた this book	2.55	0.24	-3.94	.002	×	×
	名詞句	かわいい女の子	3.05	0.37	-1.22	.127	×	?
	動詞句	この本を薦めた	2.75	0.37	-2.04	.036	×	×

SE：標準誤差

P 値：片側検定

自由度：バイリンガル、モノリンガル共に9である

○：容認する、×：容認しない

表2の結果より次のことが明らかになった。まず、バイリンガルは次の3種類のコードスイッチングに対して、3.5よりも有意に高い容認度を示した。名詞に対しては容認度が5.15であり($t(9)=3.85$, $p=.002$)、動詞に対する容認度は4.25($t(9)=1.93$, $p=.043$)、そして名詞句に対しては容認度が5.00($t(9)=4.20$, $p=.001$)であった。これらは予測と従う結果である。しかし、バイリンガルは、動詞句のスイッチングに対しては容認度が3.65であり、3.5と差のない結果となった($t(9)=0.25$, $p=.404$)。つまり、動詞句のスイッチングに対する容認度

の結果は予測と反するものだった。そして、モノリンガルは次の3種類のスイッチングに対して、3.5よりも有意に低い容認度が結果として得られ、予測に従う結果となった。それらは、名詞のスイッチングの容認度が2.35であり($t(9)=-3.29, p=.005$)、動詞のスイッチングでは容認度が2.55で($t(9)=-3.94, p=.002$)、更に動詞句に対しては2.75という容認度($t(9)=-2.04, p=.036$)であった。しかし、名詞句のスイッチングに対する容認度(3.05)は、3.5と差のないものであり($t(9)=-1.22, p=.127$)、結果は予測と異なるものであった。

3.3 考察

実験の結果より、バイリンガルは名詞、動詞、名詞句のスイッチングは容認し、予測と一致した。しかし、動詞句のスイッチングに対しては、3.5と差がない結果となり、予測に反するものになった。モノリンガルは名詞、動詞、動詞句のスイッチングに対して低い容認度を示し、これらの結果は予測に従うものだった。しかし、名詞句のスイッチングは、3.5と差のない容認度であり、予測とは異なる結果となった。

まず、バイリンガルの結果に関して、動詞句のスイッチングの容認度が「容認する」という予想に反して3.5と変わらない結果となった。この結果より考えられることは、動詞句のスイッチングは容認とも非容認とも判断できないものだという事である。なぜならば、分析で使用した基準値の3.5とは、実験参加者が自然さを判断する際に用いた6件法の間値である。また、動詞句のスイッチングが容認度の判断のしにくいことを支持するものとして、動詞句のスイッチングに対する容認度の標準誤差(0.60)が挙げられる。バイリンガルの動詞句のスイッチングの容認度の標準誤差は今回計測した標準誤差の中で最も値が大きい。つまり、これは動詞句のスイッチングに対してはバイリンガルの参加者内で容認度に大きなばらつきが見られたことを示している可能性がある。動詞句のスイッチングに対して容認とも非容認とも判断できない結果となった原因として、構造的要因が考えられる。フレーズレベルでスイッチングが起こる際、句内の構造はその句の主要部の言語の構造、つまり主要部が日本語であれば、主要語後置(head-final)の構造に従うべきであることが(14)の動詞句のスイッチングから考えられる。

(14) 動詞句のスイッチング

My teacher この本を薦めた in his class last week. (=12)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

しかし、(14)の動詞句では、句内に過去の時制を表す「一た」が含まれている。この「一た」が時制句(TP)の主要部であるから、(14)のスイッチングは動詞句のスイッチングではなく、時制句のスイッチングであることが考えられる。時制句の主要部である時制が日本語で示されているため、時制句は(15)で示すような日本語の構造である主要語後置の構造であるべきはずだろう。

(15) 時制句のスイッチング

My teacher last week in his class この本を薦めた。

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

このようなフレーズ内の構造が容認度に影響しているのであれば、今回実験で使用した(14)よりも(15)の容認度が高くなるはずである。この点については今後の調査が必要である。この時制句の主要部が日本語になっているのは動詞句のスイッチングのみならず、(16)に示すように動詞のスイッチングでも同様である。

(16) 動詞のスイッチング

My teacher 薦めた this book in his class last week. (=10)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

本研究で使用した(16)のような動詞のスイッチングにおいても、フレーズの構造が主要語の言語に従うのであれば、つまり、時制句の主要語が日本語の「一た」であることから時制句の構造が(17)のような主要語後置の構造になるべきである。

(17) 動詞のスイッチング

My teacher last week in his class this book 薦めた。

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

(17)のような時制句内が主要語後置の構造になっている動詞のスイッチングが今回の実験で使用した(16)のような動詞のスイッチングよりもバイリンガルによって高い容認度を示されるか調査が必要である。

次に、モノリンガルが名詞句のスイッチングに対して 3.5 と差のない容認度を示したことについて考えられる要因は 2 点ある。1 点目として、文内の英語の部分の少なさであり、2 点目として、文内での言語の切り替わる回数の少なさである。まず、2 節でも述べたとおり、日本語モノリンガルの母語ではない英語によって文内の大半が構成されているコードスイッチングに対して低い容認度を示すことが推測された。そのため、英文内に日本語を挿入した本実験で使用した項目に対しては低い容認度を示すと考えられた。結果として、名詞句のスイッチングのみで 3.5 と差のない容認度となり、他の 3 種類のスイッチングでは低い容認度が得られた。名詞句のスイッチングに対して低くない容認度が得られた原因として、名詞句のスイッチングの文は英語で構成されている部分が少なかったことが考えられる。日本語が 1 語のみ挿入されている名詞のスイッチング(2.35)と名詞句のスイッチング(3.05)のモノリンガルの容認度を比較すると、有意傾向で差が確認された($t(9)=2.09$, $p=.066$)。同様に日本語が 1 語のみ挿入されている動詞のスイッチング(2.55)と名詞句の

イッチング(3.05)の容認度を比較しても有意傾向で差が確認された($t(9)=2.02, p=.074$)。今回の研究で使用された項目では名詞と動詞、名詞句と動詞句では日本語の語彙の差が1、もしくは2語と少なかったため、このような傾向しか確認できなかったことが考えられる。今後は次の(18-19)のように英語の語彙数に明らかな差がある文を用いて、コードスイッチングの文内での母語と非母語の言語の語彙の量がモノリンガルのコードスイッチングに対する容認度に影響を与えるのか調べる必要がある。

(18) 日本語の構成部分の多いスイッチング

背が高くて細くて若くて綺麗なお姉さんたち were talking for hours at the coffee shop.

「背が高くて細くて若くて綺麗なお姉さんたちが喫茶店で何時間も話をしていた。」

(19) 英語の構成部分の多いスイッチング

Tall, skinny, young, and beautiful お姉さんたち were talking for hours at the coffee shop.

「背が高くて細くて若くて綺麗なお姉さんたちが喫茶店で何時間も話をしていた。」

しかし、吉田(印刷中)の結果はコードスイッチングの文内での母語と非母語の言語の語彙の量がモノリンガルのコードスイッチングに対する容認度に影響を与えるものではなかった。なぜならば、次の文では動詞1語が英語にスイッチされている場合も、3語からなる動詞句が英語にスイッチされている場合でも低い容認度を示したからである。

(20) 英語の動詞(過去形)の挿入

私の弟は よく 川の近くで 野球を played. (吉田:印刷中)

「私の弟はよく川の近くで野球をした。」

(21) 英語の動詞句(不定形)＋「した」の挿入

私と私の友達は 先週末 私の部屋で watch the movie した。 (吉田:印刷中)

「私と私の友達は先週末私の部屋で映画を見た。」

そのため、モノリンガルのコードスイッチングの容認度を判断する要素に関して非母語の要素が影響しているかについては今後の調査が必要である。

次に、文内における言語が切り替わる回数が他の3種類のスイッチングと比べて少ないことが考えられる。例えば、(22)では文内で2回言語が切り替わっている。1度目の言語の切り替えは「busy 夫」の部分で英語から日本語に切り替わり、2度目の切り替えは「夫 used」の部分で英語から日本語へと切り替わっている。文内での言語の切り替え、つまり文内コードスイッチングは、バイリンガルの特徴であるため、その回数がバイリンガルの容認度に影響を与えないが、モノリンガルにとっては言語が切り替わることが不自然であるため、

その回数が多いほどより低い容認度を示すことが考えられる。(22)と同様に、(23-24)の動詞、動詞句のスイッチングでも英語から日本語、日本語から英語と言語が2度切り替わっている。そして(22-21)で示された名詞、動詞、動詞句のスイッチングは、3.5と比較して有意に低い容認度を示していることから、言語の切り替えの回数が容認度に影響を与えていることが支持できる。

(22) 名詞のスイッチング

My busy 夫 used his laptop in the plane last time. (=9a)

「私の忙しい夫は前回、飛行機の中でパソコンを使用した。」

(23) 動詞のスイッチング

My teacher 薦めた this book in his class last week. (=10a)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

(24) 動詞句のスイッチング

My teacher この本を薦めた in his class last week. (=12a)

「私の先生は先週、授業でこの本を薦めた。」

(25) 名詞句のスイッチング

かわいい女の子 slapped the man at the restaurant again. (=11a)

「かわいい女の子はレストランでまた男性を叩いた。」

しかし、(25)に示す名詞句のスイッチングの場合、言語の切り替えが名詞句と動詞の間、つまり、「かわいい女の子 slapped」の一度のみである。言語の切り替えが名詞、動詞、動詞句のスイッチングよりも少ない回数であったため、容認度が3.5と比較して有意に低い結果とならなかったことが考えられる。文内での言語の切り替えの回数がモノリンガルにとって容認度の判断に影響するのであれば、次の(26)のような名詞句のスイッチングに対しては容認度が3.5よりも有意に低くなるはずである。

(26) 文中における名詞句のスイッチング

a. At the restaurant かわいい女の子 slapped the man again.

「レストランでかわいい女の子はまた男性を叩いた。」

b. Did かわいい女の子 slap the man at the restaurant again?

「かわいい女の子はレストランでまた男性を叩いたのか？」

しかし、この言語の切り替えの回数は、日本語文内に英語を挿入したスイッチングに対し

ではモノリンガルの容認度に影響を与えない可能性がある。吉田(印刷中)では次(27-28)の2種類のスイッチングに対してモノリンガルは低い容認度を示していることが明らかになった。

(27) 英語の動詞(過去形)の挿入

私の弟はよく川の近くで野球を played. (吉田:印刷中)

「私の弟はよく川の近くで野球をした。」

(28) 英語の動詞句(不定形)＋「した」の挿入

私と私の友達は 先週末 私の部屋で watch the movie した。 (吉田:印刷中)

「私と私の友達は先週末私の部屋で映画を見た。」

(27)では言語の切り替えは1度であり、(28)では2度切り替わっている。つまり、言語の切り替えの回数が増えない場合も容認度は低いままである。言語の切り替えの回数が多いほどモノリンガルのコードスイッチングに対する容認度が下がるのであれば、(24)の文は低い容認度ではないはずである。文中における言語切り替えの回数がモノリンガルの容認度に影響するのかについては(26-28)のような文を用いて更なる調査を行うべきである。

そして、吉田(印刷中)と同様に、本研究には修正すべき実験的要因が3点ある。1点目として、項目数の少なさである。6種類のスイッチングパターンに対して2文ずつを作成したため、統計により結果を得るには十分な量のデータが得られなかった。2点目として、実験参加者の人数の少なさ挙げられる。参加者が少なく、それにより集めたデータが少量であったことが結果に影響しているだろう。3点目として、項目の文に使用している語彙が統一されていない点である。スイッチングパターンによっては同様の語彙を使用し構成されている文もあるが、全てのスイッチングパターンによって、同様の語彙を使用した項目を作成しなかった。そのため、スイッチされている語彙が異なるため、容認度が変化する可能性が考えられる。以上の3点は今後、類似する実験を行う際に統制すべき点である。最後に、今回の結果よりコードスイッチングの容認性には複雑な要因が絡んでいることがわかった。そのため、今後は要因を統制した項目を使用して研究を行うべきだと言える。

4 おわりに

本研究では日英語バイリンガルと日本語モノリンガルに対して日英語文内コードスイッチングの容認性判断テストを行い、両者の言語能力に相違があるかを確認した。英文内に日本語の語彙を挿入したコードスイッチングの容認性判断テストの結果として、バイリンガルは名詞、動詞、名詞句のスイッチングに対して高い容認度を示した。対してモノリンガルは名詞、動詞、動詞句のスイッチングに対して低い容認度を表した。これらの結果

より、バイリンガルとモノリンガルとではコードスイッチングに対して異なる反応を示すことが明らかとなり、これは両者の言語能力の違いと言える。

参考文献

- 吉田絢奈 (印刷中)「バイリンガルとモノリンガルの日英語コードスイッチングの容認性—動詞句と時制に着目して—」『筑波応用言語学研究』21.
- Bullock, B. E. and A. J. Toribio (2012) Themes in the study of code-switching. In: B. E. Bullock and A. J. Toribio (eds.), *Cambridge Handbook of Linguistic Code-switching*, 1-17. New York: Cambridge University Press.
- Mahootian, S. (2006) Code Switching and Mixing. In: K. Brown et al. (eds.), *Encyclopedia of Language & Linguistics (2nd ed.) vol.2*, 511–527. Amsterdam: Elsevier.
- Nishimura, M. (1986) Intrasentential code-switching: The case of language assignment. In: J. Vaid (ed.), *Language Processing in Bilinguals: Psycholinguistic and Neuropsychological Perspectives*, 123-143. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Nishimura, M. (1997) *Japanese/English Code-Switching: Syntax and Pragmatics*. New York: Peter Lang Publishing.

参照ウェブサイト

“Murvey Online Surveys” <https://www.murvey.com/>

(吉田絢奈 筑波大学大学院生)

Acceptability of Head and Phrasal Code-Switching: A Comparison of Japanese-English Bilinguals and Japanese Monolinguals

YOSHIDA Junna

Japanese-English bilinguals and Japanese monolinguals rated the acceptability of intrasentential code-switching where a Japanese noun, verb, noun phrase, or verb phrase was inserted into an English sentence. Code-switching is said to be a characteristic of bilinguals, so bilinguals were predicted to accept all four types of switching whereas monolinguals not. For the most part, the results of the acceptability judgment test were in accordance with the predictions as bilinguals rated noun, verb, and noun phrase switching as acceptable whereas monolinguals rated noun, verb, and verb phrase switching as unacceptable.